埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

保育実習の自己評価基準に影響する要因について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 増南, 太志, 堀, 科 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/691

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

保育実習の自己評価基準に影響する要因について

増南　太志　　堀　　科

1　はじめに

近年，わが国では就労形態の変化や少子化対策，育児休業等の整備による保育の社会的ニーズの高まりにより，保育所数が急速な増加を示している。この背景には，平成 13（2001）年に閣議決定された「仕事と子育ての両立支援策」に盛り込まれた「待機児童ゼロ作戦」を象徴的なスタートとした国家施策により，設置基準の規制緩和が実施されたことがある。

一方，同年の児童福祉法改正による保育士の国家資格化により，その専門的技能の向上も同時に求められている。これらのことからも，保育士の量的なニーズのみならず，同時に質を保障しなければならず，指定保育士養成校に担われている養成教育の充実は急務である。また，平成 22（2010）年に一部改正された「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（平成 15 年通知）において養成課程の科目が見直されたが，この改正では，より実際の子どもに即した内容の充実に絞り込まれている。さらに，保育実習指導に対する単位数が増え，養成カリキュラムにおける保育実習指導の位置づけの重要性が明確に示された。そもそも保育実習の目的は，保育実習実施基準（前掲「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準」（平成 15 年））において「保育実習は，その習得した教科全体の知識，技能を基礎とし，これらを総合的に実践する応用能力を養うため，児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」（下線筆者）とされていることからも，実習経験を重視することにより，即戦力と実践力を養成することが今回の改訂の大きな柱となっているといえよう。

こうした実習経験が意義あるものとして学生自身の力につながるためには，実習経験を正しく振り返られることが重要であると考える。社団法人全国保育士養成協議会の「保育実習のミニマムスタンダード」（平成 17 年）にも，自己課題を明確にすることが実習経験の学びの一つとして示されている。しかしながら，学生が自分の実習経験を，何を手がかりにどのような基準をもって自己評価をしているかは曖昧な点が多い。また，実習先の評価と学生の自己評価の整合性については，先行研究においても差異が指摘されている（中西ら 2010，2011，松嵜ら 2011）。

そこで本研究では，①学生はどのような判断基準に基づいて自己評価を行っているか，②学生は実習評価項目にみられる内容を経験したことがあるか，③社会経験は自己評価にどのような影響を与えるかについて検討する。自己評価の根拠として考えられるのが，実習先の職員，学校の教員からの指導の影響，ならびに手応えがあると感じた場面があったか，またはそれまでのアルバイトなどの社会経験が自己評価にどのように影響しているのかを明らかにしたい。

2 方　　法

2.1 対　　象

川口短期大学の学生のうち，平成 23 年度の保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱ（施設）のいずれか一方でも実習を終えた学生に対し，アンケートを実施した。回答者は 122 名であった。

2.2 アンケート項目

アンケート項目には，自己評価とその根拠を調べるための選択式の項目と，アルバイトなどの社会経験を調べる記述式の項目がある。それぞれについて以下に示す。

2.2.1 自己評価とその根拠を調べるアンケート（選択式）項目

自己評価とその根拠を調べるアンケートは保育所実習用のものと施設実習用のものがある。それぞれ，川口短期大学で使用している実習評価票の項目を基に作成した。実習評価票では，保育所・施設のいずれにおいても，「態度」の 4 項目と「知識・技能」の 10 項目があるが，社会経験との関連をみるため，保育士としての専門性を問う項目は削除し，「態度」の 4 項目と「知識・技能」の 2 項目をアンケート項目として選択した。本研究では，これら 6 項目に対し，①自己評価として，「実習ではできていたと思う」と「できていなかったと思う」のいずれかの選択，②自己評価の根拠として，職員からの指導により「自信がついた」，「力不足を感じた」，「指導がなかった」のいずれかの選択，教員からの指導により「自信がついた」，「力不足を感じた」，「指導がなかった」のいずれかの選択，実習中の具体的な場面に関して，「手応えを感じた場面があった」「力不足を感じた場面があった」「特にない」のいずれかの選択を求めた。保育所実習および施設実習のアンケートの例を表 1 に示す。

2.2.2 社会経験を調べるアンケート（記述式）項目

このアンケートでは，学生が実習を行う前に，アルバイト等の社会経験があるか，またそこでどのような学びをしているかについて調べた。形式は自由記述式であり，項目内容は下記である

表 1　保育所実習（上段）および施設実習（下段）のアンケートの例

		①実習ではできていたと思う ②できていなかったと思う	職員の指導 ①自信がついた ②力不足を感じた ③指導がなかった	教員の指導 ①自信がついた ②力不足を感じた ③指導がなかった	①手応えを感じた場面があった ②力不足を感じた場面があった ③特にない
態度	意欲・積極性	①　②	①　②　③	①　②　③	①　②　③
	責任感	①　②	①　②　③	①　②　③	①　②　③
	探究心	①　②	①　②　③	①　②　③	①　②　③
	協調性	①　②	①　②　③	①　②　③	①　②　③
知識・技能	チームワークの理解	①　②	①　②　③	①　②　③	①　②　③
	子どもとの関わり	①　②	①　②　③	①　②　③	①　②　③

		①実習ではできていたと思う ②できていなかったと思う	職員の指導 ①自信がついた ②力不足を感じた ③指導がなかった	教員の指導 ①自信がついた ②力不足を感じた ③指導がなかった	①手応えを感じた場面があった ②力不足を感じた場面があった ③特にない
態度	意欲・積極性	①　②	①　②　③	①　②　③	①　②　③
	責任感	①　②	①　②　③	①　②　③	①　②　③
	探究心	①　②	①　②　③	①　②　③	①　②　③
	協調性	①　②	①　②　③	①　②　③	①　②　③
知識・技能	チームワークの理解	①　②	①　②　③	①　②　③	①　②　③
	子どもや利用者とのかかわり	①　②	①　②　③	①　②　③	①　②　③

質問紙（記述式）内容

①　これまでどのような労働（仕事、アルバイト含め　実習経験は除きます）経験がありますか。

②　①について、そこで必要なスキル（技術含め）には、どのようなものがありましたか。

③　①について、そこでの指導者からどのような要求がありましたか。

図 1　社会経験を調べるアンケート内容

（図 1）。

このうち，②と③の記述内容については，2.2.1 の選択式アンケート結果との関連性を検討するため，同様の 6 項目「意欲・積極性」「責任感」「探究心」「チームワーク・協調性」「子どもとのかかわり」のいずれかに分類し，分析を行った。

2.3　倫理的配慮

本調査では，学生に回答させる前に，①回答した内容が成績に影響しないこと，②回答した内容を他者に見せないこと，③個人情報を守ることを口頭および文章で伝え，同意を得たうえでアンケート調査を実施した。

3　結　　果

回答者 122 名のうち，欠損値のある項目を除き，自己評価とその根拠を調べるアンケートについては，保育所では 94 名，施設では 103 名が分析対象となった。また，社会経験を調べるアンケートについては，122 名全員を分析対象とした。

3.1　学生はどのような根拠に基づいて自己評価を行っているか

学生の自己評価とその根拠について，表 2 に示した。表の上段は保育所実習における自己評価とその根拠の分析結果であり，下段は施設実習における自己評価とその根拠の分析結果である。職員あるいは教員の指導により「自信がついた」「力不足を感じた」「指導なし」の 3 つの条件に対し，自己評価の「できていた」「できていなかった」の人数を分析した。また，具体的な場面として，「手応えを感じた場面があった」「力不足を感じた場面があった」「特になし」の 3 つの条件に対し，自己評価の「できていた」「できていなかった」の人数を分析した。統計的検定には，フィッシャーの正確確率検定を用い，5%水準で有意差あるいは有意傾向があった場合は，ホルムの方法により，3 つの条件間の多重比較を行った。以下は保育所実習および施設実習それぞれについて説明する。

3.1.1　保育所実習の自己評価の根拠

表 2 の上段に示されているとおり，「意欲・積極性」「責任感」「チームワークの理解」「子どもとの関わり」では，職員の指導や教員の指導などの複数の根拠において，自己評価との関連が有意であり，職員や教員の自信をもたせる指導や学生自身の手応えを感じた場面がある場合に，自己評価が肯定的なものになる傾向があった。また，「探究心」では職員の指導が，「協調性」では具体的な場面が，自己評価と関連があった。

全体的にみると，自己評価のどの項目においても，職員や教員の指導により「自信がついた」あるいは「手応えを感じた」場面があった学生では，「できていたと思う」と肯定的な自己評価を行うものが多かった。しかしながら，職員や教員の指導および具体的な場面によって，「力不

足を感じた」学生においても，「できていなかったと思う」と評価する学生よりも，「できていたと思う」と評価する学生が全般的に多かった。職員や教員の指導および具体的な場面で「力不足を感じた」としても，必ずしも自己評価が低くなるとは言えない結果であった。

3.1.2　施設実習の自己評価の根拠

表2の下段に示されているとおり，「意欲・積極性」「探究心」「協調性」「チームワークの理解」「子どもや利用者とのかかわり」では，保育所実習の場合と同様，職員の指導や教員の指導などの複数の根拠において，自己評価との関連が有意であり，職員や教員の自信をもたせる指導や学生自身の手応えを感じた場面がある場合に，自己評価が肯定的なものになる傾向があった。また，「責任感」では教員の指導が自己評価と関連があった。

施設実習においても，全体的にみると，自己評価のどの項目においても，職員や教員の指導により「自信がついた」あるいは「手応えを感じた」場面があった学生では，「できていたと思う」と肯定的な自己評価を行うものが多かったが，職員や教員の指導および具体的な場面によって，「力不足を感じた」学生においても，「できていなかったと思う」と評価する学生よりも，「できていたと思う」と評価する学生が全般的に多くみられた。そのため，職員や教員の指導および具体的な場面で「力不足を感じた」としても，必ずしも自己評価が低くなるとは言えない結果であった。

3.2　学生は実習評価項目に見られる内容を経験したことがあるか

3.2.1　社会経験の種類

学生がどのような種類の社会経験をしてきたのかを図2に示した。この結果から，販売（49人），飲食店（42人），接客業（18人），現場補助・指導（12人）というように，サービス業ならびに人とかかわる仕事に従事した経験のある学生が多いことがわかった。一方で，郵便局やスーパーの仕分け作業等，人と関わる仕事以外の仕事に従事している学生は少なかった。このことは，わが国の産業構造の中で，サービス業に学生アルバイトが占める割合が高いことが関係しているとは思われるが，本学の学生が保育の専門性にかかわらず，何らかの形で人とかかわる仕事を既に経験していることが明らかになった。

3.2.2　社会経験で学んだスキル

学生の自由記述を，先にあげた6つの評価項目の評価項目カテゴリーの目的により近い内容に分類した。表3は，本学保育実習評価表の評価項目に対する評価内容である。この評価基準を参考に，保育以外の職務にも共通する内容に読み替えて，分類した。読み替え内容は表中の括弧（　）内に示している。

表 2　保育所実習および施設実習の自己評価とその根拠

自己評価 ＼ 根拠		態度								知識・技能			
		意欲・積極性		責任感		探究心		協調性		チームワークの理解		子どもとの関わり	
		できていたと思う	できていなかったと思う	できていたと思う	できていなかったと思う	できていたと思う	できていなかったと思う	できていたと思う	できていなかったと思う	できていたと思う	できていなかったと思う	できていたと思う	できていなかったと思う
職員	自信がついた	51	1	47	1	45	4	49	2	50	3	73	1
	力不足を感じた	26	10	22	13	14	16	22	5	23	4	15	4
	指導なし	5	1	7	4	10	5	12	4	13	1	1	0
教員	自信がついた	63	4	50	3	47	9	51	3	46	4	66	0
	力不足を感じた	16	6	16	11	9	8	14	4	12	4	9	5
	指導なし	3	2	10	4	13	8	18	4	28	0	14	0
場面	自信がついた	54	4	43	3	41	9	50	3	52	1	72	0
	力不足を感じた	26	8	25	13	19	9	16	6	21	6	16	3
	指導なし	2	0	8	2	9	7	17	2	13	1	1	2

自己評価 ＼ 根拠		態度								知識・技能			
		意欲・積極性		責任感		探究心		協調性		チームワークの理解		子どもとの関わり	
		できていたと思う	できていなかったと思う	できていたと思う	できていなかったと思う	できていたと思う	できていなかったと思う	できていたと思う	できていなかったと思う	できていたと思う	できていなかったと思う	できていたと思う	できていなかったと思う
職員	自信がついた	57	4	59	6	54	4	60	5	69	3	78	0
	力不足を感じた	24	10	19	7	18	10	8	11	11	6	18	4
	指導なし	8	0	10	2	10	7	10	9	10	4	2	1
教員	自信がついた	63	5	58	4	47	5	51	5	54	4	66	1
	力不足を感じた	12	7	15	8	20	9	8	12	10	3	17	2
	指導なし	14	2	15	3	15	7	19	8	26	6	15	2
場面	自信がついた	60	3	52	4	56	4	59	3	65	1	76	0
	力不足を感じた	17	7	22	7	19	8	10	13	13	5	18	3
	指導なし	12	4	14	4	7	9	9	9	12	7	4	2

上段は保育所実習の自己評価とその根拠。下段は施設実習の自己評価とその根拠。$^{**}p<0.01$，$^{*}p<0.05$，$^{+}p<0.1$。

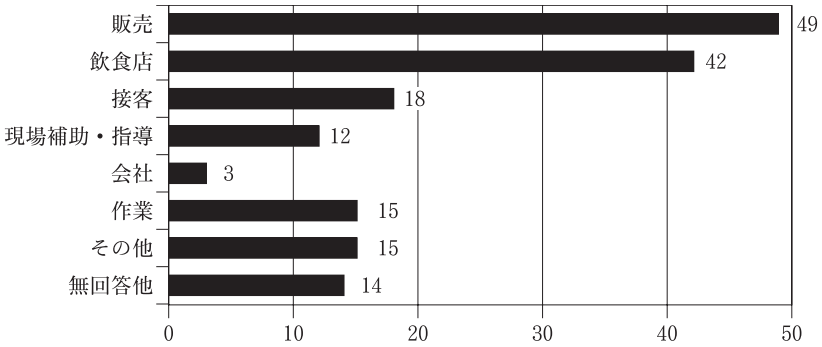

図 2　学生の社会経験の種類

表 3　評価項目の分類基準

項　　目	評　価　内　容
意　欲・積極性	実習（職務）に対する意欲や取り組みの積極的態度
責　　任　　感	ルールを遵守したり，指示されたことを的確に実施するなど責任のある態度
探　　究　　心	自ら質問をして知ろうとしたりする探究的態度
協　　調　　性	周りの人の意見をよく聞き，強調して行動する態度
チームワークの実践 （同カテゴリーとしてカウント）	保育活動（職務）を進める上での保育士同士（職員間）の連携や指導員，看護師，栄養士等他職種との連携を学んだか。
個々のこどもへの対応	子ども（対応する人）の個人差や発達の違いを理解し，生活環境にともなう個人のニーズに注目した対応方法などを学んだか。

上記の分類基準をもとにカテゴライズし，アルバイト等の社会経験において，学生自身が学んだと自覚していることを図 3 に示した。なお，分類にあたって，一文に複数の文言が含まれている場合等については，それぞれ別のカテゴリーとカウントし，複数回答とした。

具体的な回答内容は，「意欲・積極性」については，積極性，行動力，笑顔，臨機応変他のような記述がみられた。「責任感」については，ミスをしない，必要な操作を覚える，ルール，マナーを守る他の記述がみられた。「探求心」については，職務内容による専門的な技術（薬の効果を知る，ホスピタリティ他）等も含めている。「チームワーク・協調性」については，人間関係や思いやり，周りの人を気遣う等相互作用的な協働する力他，「子どもとのかかわり」については，子ども理解や指導力他の回答がみられた。

3.2.3　社会経験において指導者から要求された内容

表 3 の分類基準をもとにカテゴライズし，アルバイトなどの社会経験において，指導者から要求されたことを図 4 に示した。

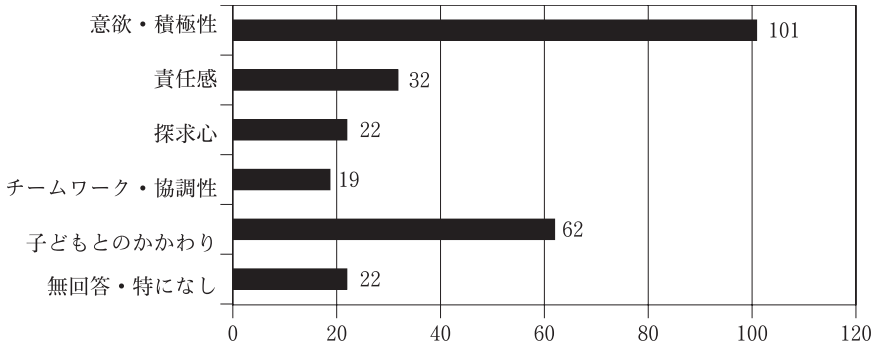

図 3　アルバイト等で学んだ職務に必要なスキル

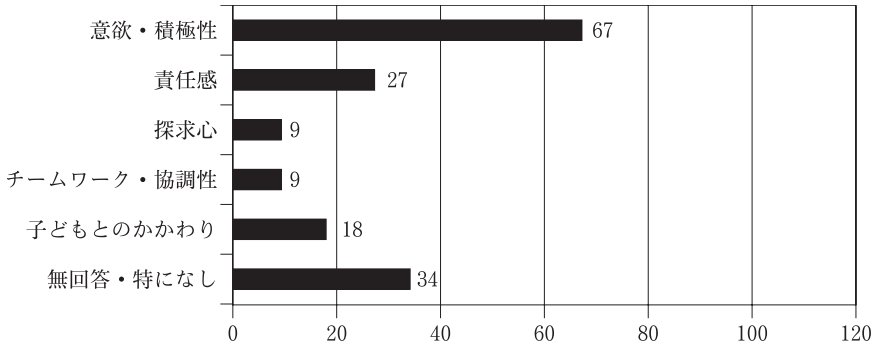

図 4　アルバイト等先の指導者からの職務に対する学び

具体的な回答内容は，「意欲・積極性」については，学生の記述には自主性，積極性，笑顔，挨拶他のような記述がみられた。「責任感」については，決まりを守る，適当にやらない，マニュアル通り他の記述がみられた。「探求心」については，質問する，自分で判断しない等の他，職務内容による専門的な技術等も含めている。「チームワーク・協調性」については，チームワーク，まわりの人をよく見る，報告・連絡・相談他，「子どもとのかかわり」については，子ども理解，一人一人にあった答え方他の回答がみられた。

社会経験において，「必要なスキル」として記述された内容（図 3）と「指導者からの要求」として記述された内容（図 4）では，前者の方が記述が多かったが，いずれの項目に対しても記述があることや，「意欲・積極性」および「探究心」に関する記述が多かったという点で，共通する部分もみられた。

3.3　社会経験は自己評価の高さにどのような影響を与えるか

社会経験が自己評価の高さにどのような影響を与えるかを調べるため，社会経験の「必要なスキル」および「指導者からの要求」の各項目と保育所および施設の自己評価の各項目の関係を，

表 4　社会経験の各項目と自己評価の各項目の分析の対応関係

社会経験の各項目			対応する自己評価項目	
必要なスキル	指導者からの要求		保育所	施　設
意欲・積極性	意欲・積極性	➡	意欲・積極性	意欲・積極性
責任感	責任感	➡	責任感	責任感
探究心	探究心	➡	探究心	探究心
チームワーク・協調性	チームワーク・協調性	➡	協調性	協調性
チームワーク・協調性	チームワーク・協調性	➡	チームワークの理解	チームワークの理解
子どもとのかかわり	子どもとのかかわり	➡	子どもとのかかわり	子どもや利用者とのかかわり

表 5　学生の社会経験と実習自己評価の高さの関係

保育所							施設						
			必要なスキル		指導者からの要求					必要なスキル		指導者からの要求	
			1	0	1	0				1	0	1	0
意欲・積極性	自己評価	1	58	24	39	43	意欲・積極性	自己評価	1	62	27	39	50
		2	9	3	5	7			2	11	3	8	6
		p	1		0.7651				p	0.7525		0.3975	
責任感		1	3	73	4	72	責任感		1	5	83	4	84
		2	2	16	1	17			2	3	12	1	14
		p	0.2427		1				p	0.08983＋		0.5525	
探究心		1	14	55	7	62	探究心		1	21	61	11	71
		2	6	19	4	21			2	4	17	2	19
		p	0.7771		0.4752				p	0.7759		1	
協調性		1	9	74	4	79	協調性		1	12	66	3	75
		2	1	10	1	10			2	1	24	2	23
		p	1		0.4711				p	0.1797		0.5926	
チームワークの理解		1	10	76	5	81	チームワークの理解		1	13	77	5	85
		2	0	8	0	8			2	0	13	0	13
		p	0.5931		1				p	0.3642		1	
子どもとのかかわり		1	5	84	3	86	子どもや利用者とのかかわり		1	7	91	5	93
		2	1	4	1	4			2	0	5	1	4
		p	0.2863		0.1993				p	1		0.2638	

$^{**}p<0.01$，$^{*}p<0.05$，$+p<0.1$。p 値はフィッシャーの正確確率検定による。

以下の表 4 に示す対応関係に従って分析した。この対応関係は，社会経験の各項目と自己評価の項目のうち，関係が深いと思われるもの同士を対応づけたものである。例えば，表 4 では，社会経験の「必要なスキル」および「指導者からの要求」の「意欲・積極性」から，保育所および施設の自己評価項目の「意欲・積極性」へと矢印で示している。これは，「必要なスキル」あるいは「指導者からの要求」の「意欲・積極性」に関する記述の有無が，保育所あるいは施設の「意

欲・積極性」の自己評価が高さと関係があるかどうかを分析することを意味する。なお，社会経験の項目のうち，「チームワーク・協調性」は，自己評価項目の「協調性」および「チームワークの理解」の両方と関係が深いと思われるため，この両者との関係を分析した。

社会経験の各項目と自己評価の各項目を分析した結果を表5に示した。ほとんどの項目では，社会経験と自己評価の高さの間に関係は示されなかった。唯一，「必要なスキル」の「責任感」に関する記述がみられない学生ほど，施設実習の「責任感」の自己評価が高い可能性がみられた（フィッシャーの正確確率検定，$p < 0.1$）。しかし，この結果は有意傾向であったため，明確な関係があったとまでは言えず，今後さらに検討する必要がある。

4　考　　察

本研究では，①学生はどのような判断基準に基づいて自己評価を行っているか，②学生は実習評価項目に見られる内容を経験したことがあるか，③社会経験は自己評価にどのような影響を与えるかについて検討するため，アンケート調査を行った。それぞれの考察を以下に示す。

4.1　学生はどのような判断基準に基づいて自己評価を行っているか

保育所実習および施設実習の両方で，職員および職員の指導によって自信がついた学生や手応えを感じた場面がある学生は，肯定的な自己評価を行う傾向にあった。

自己評価のどの項目においても，職員や教員の指導により「自信がついた」あるいは「手応えを感じた」場面があった学生では，「できていたと思う」と肯定的な自己評価を行うものが多かった。しかしながらが，職員や教員の指導および具体的な場面によって，「力不足を感じた」学生においても，「できていなかったと思う」と評価する学生よりも，「できていたと思う」と評価する学生も多くみられた。そのため，教員や職員の指導や具体的な場面が自己評価の根拠になっている学生もいれば，それらの根拠とはあまり関係なく自己評価を行っている学生がいると考えられた。後者の学生に関しては，もっと別の根拠にしたがって自己評価を行っている可能性が考えられる一方，自己評価そのものを正確に行っていない可能性が考えられる。

4.2　学生はアルバイトなどの社会経験をとおして何を学んできているか

社会経験において，「必要なスキル」と「指導者からの要求」の両方とも，「意欲・積極性」「責任感」「探究心」「チームワーク・協調性」「子どもとのかかわり」の全項目に対して記述がみられた。その中でも特に「意欲・積極性」と「探究心」に関する記述が多くみられ，この点で，「必要なスキル」と「指導者からの要求」は似たような傾向を示していた。仕事をするうえで，

指導者からの要求を素直に受け止め，学ぼうとする姿勢があれば，当然のこととも言える。また，社会的スキルの中でも全ての職種に共通するものであり，仕事に従事するものとして基本的な態度であるということから，回答数が多い内容であると思われる。その観点から考えると，「指導者からの要求」が「必要なスキル」に影響を与えているために，似たような傾向を示していた可能性がある。

これらの結果から，実習までの間に社会経験を通して，評価項目にかかわる経験をしていることが明らかとなった。予めアルバイトの労働などを通して，労働に対する基本的態度は養われている学生が多いということがいえよう。また，とくに人とのかかわりという点においてすでにサービス業の経験等があり，一般的なマナーなどは経験した上で実習にのぞんでいることが分かった。

4.3　社会経験は自己評価にどのような影響を与えるか

ほとんどの項目において，社会経験と自己評価の間に関連はみられなかった。社会経験を通して「必要なスキル」として認識したものがある学生では，施設実習の「責任感」に対する自己評価が低い可能性があるが，有意傾向であるため，明確な差があるとは言えない。本研究の結果では，社会経験と自己評価の間に関係を示すことができなかったが，後述するように，アンケート項目等を改善し，結果を見直す必要があると考えられる。

4.4　学生の自己評価の妥当性

学生の自己評価の判断基準を検討した結果，職員および教員の指導や具体的な場面によって，自己評価を行っていると思われる学生と，それらの根拠とはあまり関係なく自己評価を行っている学生がいた。後者の学生については，①本研究で取り上げたような根拠以外に別の判断基準にしたがって自己評価を行った可能性と，②自己評価そのものを正確に行っていない可能性が考えられる。また，本研究では，社会経験と自己評価との間に関連が示されなかった。自己評価で取り扱っている項目は，「意欲・積極性」「責任感」「探究心」「協調性」など，社会人として必要とされる態度が含まれている。これらは，保育・福祉に特化した項目ではないため，学生の過去の社会経験との関連がほとんどみられないという結果には疑問が残る。そのため，本研究で取り上げた根拠とあまり関係なく自己評価を行った学生については，上記の 2 つの可能性のうち，自己評価そのものを正確に行っていない可能性の方が高いかもしれない。

5　おわりに

本研究の結果，①学生の中には，職員および教員の指導や具体的な場面に基づいて自己評価を

行っているものと，自己評価そのものを正確に行っていないと思われる学生がいたこと，②いずれの評価項目に対しても，学生の社会経験がみられていたが，特に「意欲・積極性」に関する経験が多かったことが知見として得られた。しかしながら，社会経験と自己評価の間に関連が示されず，その理由として，学生の中に，正確に自己評価をしていないものが含まれている可能性が考えられた。

今後の課題としては，学生の正確な自己評価を促し，社会経験と自己評価の関係をより適切に捉えられるようにする必要がある。そのため，アンケート項目の意図を正確に伝えられるよう改善していくことが考えられる。

参考文献

中西利恵・大森雅人・益田　圭・曲田映世・高濱麻貴（2010）　実習指導の効果を高める教育方法の研究 ── 保育所実習における学生の自己評価と現場評価の比較検討から ──　相愛大学人間発達学研究，3, 31-38.

中西利恵・大森雅人・曲田映世・高濱麻貴（2011）　実習指導の効果を高める教育方法の研究（その 2）── 学生の自己評価と現場評価のズレを活用した事前・事後指導のあり方 ──　相愛大学人間発達学研究，3, 47-54.

堀田正央・松嵜洋子（2011）　保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱ（施設）における実習園評価および自己評価の評価観点の差異に関する研究　埼玉学園大学研究紀要，11（人間学部編），131-144.

（2012 年 9 月 28 日提出）